“Play with the cards you’re dealt（…whatever that means.）“

第 14 期大学院生　川村 澄明
（第 13 期 OB）

学部 3 年生の時にはあんなに長く感じた月日も，過ぎてしまえばあっという間なもので，いつの間にか（1 年ぶり 2 度目の）卒業エッセイの執筆を依頼される時期になっていました。飛び級制度を適用して大学院に進学したものの，修士課程の 2 年間しか在籍しなかったため，結局小野ゼミには 3 年間お世話になったことになります。そんな 3 年間の締めくくりに相応しいエッセイ，なんて大層なものを執筆できる文才は，あいにく持ち合わせていませんので，ここでは小野ゼミというハードな環境を生き抜くために，私が意識していたことをちょっとだけ，吐露できたらいいなと思うことにしました。

私が意識していたことの 1 つを端的に表現している言葉がそう，タイトルにある “Play with the cards you’re dealt（…whatever that means.）” というものです（かっこ書きは原文の続き）。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが，この言葉は，かの有名な漫画『スヌーピー』に出てくるセリフなのです。谷川俊太郎による訳は，「配られたカードで勝負するっきゃないのさ（…それがどういう意味であれ）」です。

小野ゼミでの活動では，ケースを解いていれば壁にぶつかるし，ディベートで立論を考えれば壁にぶつかるし，論文で仮説を立てようとすれば壁にぶつかるし，兎に角，自分の能力のなさに嫌気がさすような場面に遭遇しまくりました。出来ればこんな苦労は後輩にはして欲しくない，という思いから，指導にも意欲的に取り組んできたつもりです。後輩からは，幾度か感謝こそされる場面もありましたが，それでも待っていたのは，まだまだと思わせられるような苦い経験ばかりでした。そんな時には，自分の能力不足に目を向けるのを止めてしまって，誰かに責任を転嫁させてしまいたくなります。そうした時に，それでも踏ん張ろうとして，しばしばこの言葉を思い出していました。

ただし，私 1 人では，毎回そのように奮起することは難しかったと思います。今思えば，小野ゼミという環境が，妥協を許さず，かつ前へ進もうとする人を認めてくれる環境であったからこそ，可能だったのだと思います。自分の手元に配られたカードがこんなに弱くなければ…，あぁ，隣の人はなんて良いカードを持っているんだ…，これから，そんな思いを抱いた時には，この言葉と，それを信じて頑張ることの重要性を教えてくれた，小野ゼミでの経験を活かして，乗り越えていきたいと思います。

最後に，小野先生，同期の第 13 期生，大学院生の皆様，大切な後輩たち，そしてこれまで小野ゼミに命を吹き込んでこられた先輩方。皆様のおかげで，私は，これ以上ないほど濃く，かけがえのない 3 年間を過ごすことができました。この経験は，これからの私の人生に必ずや，大きな影響を与えると思います。本当に，本当に，ありがとうございました。小野ゼミを通して出会った皆様は，私の手元に配られたカードが何であれ，それを最大限に活用し，豪華絢爛に輝やかせるための力をくれる存在ばかりでした。